



## スプリングピアノリサイタル ピアニスト 渡部麻千子 さん

### コロナ禍で考えるSAAの仕事

矢橋潤一郎 会員

入会して来週で22年になります。ロータリアンになったからには、一度は赤いタスキをかけたいと願っておりました。幹事を仰せつかり、他にも主要な委員長も務めました。赤いタスキには何故か縁がございませでした。コロナ禍で例会が開かれない日が続きましたが、こんな年にSAAになったのも、またご縁かと。

私が仰せつかった役職、例えば幹事といえど誰を思い浮かべるか、誰を見習うか、と自問してみ、すぐに出てくる先輩は、いらっしやいませ。ではSAAで、となれば、3名がすぐに思い浮かべられます。おひとり、鬼軍曹と呼ばれた加藤会員。原理原則のSAAを体現されたような記憶があります。もうひとりが、志々見会員。私が幹事するときにお引き受けいただきました。ロータリー旗をパークホテルが南クラブのものと同違って掲揚したときの憤慨ぶりは、よく覚えております。おふたりとも退会されてしまいました。見習うというよりは、印象深い方々です。

3人目は、私が交換学生として派遣された先、オーストラリアのホストクラブの方です。1986年ですから35年前になります。West Torrensロータリークラブでは、SAAが司会進行を務めます。日本でいうニコニコボックスのようなコーナーも、SAAが扱います。親睦活動委員会も兼ねているわけです。例会中、SAAは結構な仕事を抱えることになります。日本国内でも司会をSAAが務めるクラブはありますが、当地区では馴染みがありません。私のスポンサーだった西クラブも、当クラブ同様、会長の進行です。ロータリーとはそういうものと思いついて行った先で、赤いタスキの方が喋り倒している様は新鮮でした。

そのSAAは、独身でした。死別とか離婚とか、或いは未婚を貫いたのか、事情は結局わからずじまいですが、奥さんがいないという英語は聞き取れました。高校生の私からしてもご年配でした。独り身のSAAという共通項でも、思い浮かべる要因になるのかもしれませんが。派遣期間は年度をまたぐので、帰国直前のSAAは到着時の方とは異なります。私が印象に残っているSAAは、到着時の方です。帰国する頃の方が、英語も覚えてコミュニケーションも取れるようになっていきます。でも印象深いのは、到着時の、周囲が何を言っているかわからない頃なのです。

今年度も残り3ヶ月となりました。3/4は29回中9回が休会でした。20回の例会でも、スクール形式が10回。テーブル指定はたった3回、それも新委員会の配置のみです。SAAの醍醐味である座席割が、今年度は1回しかできておりません。円卓にしても、かつての9人掛けは無理。5人や6人でひとつの卓を構成するには、座席指定のテーマが細切れになります。そうするとあえて卓割をする意味があるのか、スクール形式でフリーに座ってもらうのと同じく、円卓でもフリーでいいのでは。そんな感じになる可能性もあります。食事メニューも、SAAの醍醐味です。直前の休会となると、食材ロスが生じ、補償の問題が生じますので、休会時の負担軽減を見越して、軽食を増やしてきました。SAAになったらこんな座席割をしてみたい、こんな食事メニューをしてみたい、と楽しみにしておりましたが、これもコロナ禍では仕方ありません。残り1/4も安全重視でがんばります。

